

# 2013年6月 日本の稲作を守る会便り

6月配送のお米は

有機栽培米 玄米・白米 綿引 克友さん(茨城県常陸太田市)  
次回7月のお米配送は7月6日(土)の予定です。都合の悪い方  
対応させていただきますのでご連絡ください。

## ギフトカタログができました。

お中元、帰省やお盆の手土産にお使いください。いかようにもご注文に応じられます。ぜひご用命くださいますようお願い申し上げます。

### 種子のお話

ホームセンターに行くと、かわいらしい花の苗とか野菜の苗が目につきます。今は夏野菜の真っ盛りです。種子の袋をあけるといろいろな色で消毒薬がコーティングされて驚かされます。大丈夫なのかな、有機リン剤やネオニコチノイド系農薬で殺菌されていないかと気になるところです。先日乾燥芋の製造者が有機JASの加工の申請をされる話の折、サツマイモの苗はどのように調達するのかということが話題になりました。4畝の畑で、しかも有機のサツマイモの苗などあるはずがなく、購入に頼むという話でした。としたなら絶対薬剤処理されているよねということになり、有機といえるのかが問題になりました。ネオニコチノイド系で殺菌されていたらとおそろしくなりました。調べていくと種子の世界も大変なことになっています。多国籍企業の種子の独占、除草剤と遺伝子組み換え種子、まともな子孫が残せないF1種子。釈迦に説法になるかと思いますが、ご一読ください。

本年から農場でも野菜を作ろうということになって、未消毒の種を手にいれるのが大変でした。売っていないのです。ネットで調べたり種苗会社に問い合わせたり、有機野菜農家に譲ってもらったり、今年はまず種とりからだねということになりましたが、F1種子からだということになりますやら。現在種子消毒に使用されている農薬は粉衣99製剤 塗沫75製剤 浸漬198製剤(反農薬東京グループ調)もあるそうです。種の袋にチウラムとかキャプテンとかベノミルとか書かれているのがそうですが、いずれも毒性があるそうです。人は種を食べるわけではないから大丈夫だと種苗会社は豪語しますが、それがネオニコ系(ネオニコチノイド系)の殺虫剤だったら恐ろしいことです。さらに輸入種子(袋に書かれている生産地でわかる)の農薬使用履歴は検証できないし、検証もしていないそうです。



「F1」とは品種に関する専門用語で「一代雑種」を意味します。交配によって作られた新品種の一代目ということです。品種改良の成功例として、人間が意図した形や姿、性質が備わっていれば使命を果たします。二代目以降は想定されていないのです。F1の性質を受け継ぐF2はごくわずかです。昨年米国シアトルのアーチストフォ-ジャパンからグリーンオイルプロジェクトに送られてきた「ブラックオイル」というひまわりの種をまいたところ、F2種子だったので、様々な色のひまわりが咲きました。F2の多様な花の色を愛でる分には問題ありませんが、農産物として流通させるには問題です。そのため農家は種苗会社の種子を買い続けていかなければなりません。種子会社の支配力が強くなります。

地元で伝わる伝統的な品種が放棄され消滅し、種苗会社に支配されてしまったから、今度はF1種子を遺伝子組み換え種子に置き換えられたら私たちは遺伝子組み換え作物しか食べられなくなります。TPP交渉や農業資材屋さんの店頭をみると事態はますます進行し、単なる杞憂ではなくなる恐れが濃厚になってきました。

バイオグローバル企業であるモンサント社はすべての植物を枯らす除草剤を開発し世界中に売っています。除草剤「ラウンドアップ」がそれです。すべてを枯らしては農作物にならないので、それに耐

えうる遺伝子組み換え品種（大豆、菜種、トウモロコシ、綿花など）を開発して、農薬と遺伝子組み換え種子をセットにして売りまくっています。さらに遺伝子組み換えによって、不稔性の種子（採った種子を翌年蒔いても芽がでない種子、ターミネーター種子）を開発して毎年農家が種を買わなければならないようにしています。アメリカで生産される大豆の94%はラウンドアップ耐性大豆だそうです。トウモロコシの72%、綿の80%、ナタネの90%、テンサイの95%アルファルファの33%、パパイヤの80%が人工的に遺伝子を挿入し、除草剤をかけても枯れない、殺虫成分を持つ、特定の病気に強い、などの性質を持たせたGM種だそうです（米国の市民団体「食品安全センター」調べ）。TPPを待つまでもなく、食卓に上っている味噌も醤油も原材料が遺伝子組み換え種子不使用と表記されていなければこれらの種子と考えても間違いのないところだと思います。植物油には遺伝子が混入しないことから、油脂用大豆、なたねはほとんどが遺伝子組み換えになってしまいました。それが輸入港から油脂工場に運搬される際に、道路に種が落ち、遺伝子汚染を広げる恐れがあります。ボランティアの抜き取り作業で辛うじて汚染を防いでいるのが現状です。

ところで遺伝子組み換え食品を長期に食べ続けるとどうなるか。

フランス・カーン大学セラリーニ教授などが200匹のラットを使って2年間動物実験をしました。この動物実験はモンサント社の除草剤耐性トウモロコシ「NK603」と、それに用いる除草剤「ラウンドアップ」が使用されているそうです。「未来の食卓」で有名なドキュメンタリー映画作家のジャン＝ポール・ジョーさんがこの実験を「世界が食べられなくなる日」という映画にして発信しています。「週刊金曜日」5月24日944号で、天笠啓祐さん（市民バイオテクノロジー情報室）がこの映画の解説をされています。①ラウンドアップをかけていない遺伝子組み換え（GM）トウモロコシを与えた集団 ②ラウンドアップをかけたGMトウモロコシを与えた集団 ③GMトウモロコシを用いないでラウンドアップを含んだ水を与えた集団 対照群として④ラウンドアップもGMトウモロコシも含まない飼料を与えた集団と比較された結果が出ています。実験の結果として、投与群は対照群に比べ、様々な問題が起きたそうです。メスは投与群で早期死亡率が高く、大きな腫瘍の発生率も高かったそうです。オスでは肝機能障害や腎臓の肥大、皮膚ガン、消化器系への影響がみられたそうです。実験結果全体の特徴として投与群は対照群に比べ、低い曝露でも影響が出ており、ラウンドアップによるホルモンかく乱に加え、除草剤耐性をもたらすために生じる生成物が代謝経路に介入して抵抗力を引き下げ、肝臓や腎臓に悪影響をもたらしたのではと指摘されています。映画の中に出てくるラットの姿は、未来の私たちの姿かもしれません。

安全な食材食品を手に入れるためには顔の見える生産者との付き合いがあるとか、製造現場が見える環境にあるとかでなければ、私たちは食品表示に頼るしかありません。ほとんど遺伝子組み換え食品になっている米国では表示が義務付けられていません。米国の人はGM食品と気づかずに食べているそうです。米国は「貿易の妨げになる」として遺伝子組み換え食品の表示を世界各国になくすよう要求しています。環太平洋連携協定（TPP）交渉でもこの問題が浮上してくると思います。その米国でGM食品表示を求める運動が広がっているそうです。全米ではカリフォルニア州が一番早くGM食品表示法案を提出したそうです。昨年11月に住民投票がおこなわれましたが、危機感を持ったGM種子会社のモンサントやデュポン、ペプシコやコカコーラなどの食品大企業が「表示をすると価格があがる」というキャンペーンを張り、圧倒的な宣伝力で否決に追い込みました。（賛成49%・反対51%）こうした宣伝にモンサントなどは4500万ドル（約45億円）も投入したそうです。（食品安全センター調）。しかし各州で表示を望む世論は上がってきているそうです。日本のGM食品表示も米国に配慮して表示義務を免除した食品がたくさんあるそうです。TPP交渉の成り行きに注視するとともに正確に表示するよう働きかけていかなければならないと思います。

今までは農家は収穫の1部を種として選別して残し、翌年に播種することで優良な種子を確保する術を持っていました。F1種子やGM種子は種どりができません。大企業が儲かる画一的な種子だけになり、地域や自然にはぐくまれた多様な種子は消滅しつつあります。FAO（国連食糧農業機関）や各国の研究機関が遺伝子バンクを設立し多様な種子を保護する活動に乗り出しています。有機農業者の集まりでは種苗交換会なども開き在来種を保存する活動もしているところもあります。が、近代農業は農薬、化学肥料、それに合う品種の3点セットで進んできました。農薬と化学肥料を使わない有機農業で種子を守らなければならないのではないかと強く思うようになりました。ゴマ粒のような小さな1粒の種子は、命の源です。それが危機に瀕していることに痛みを感じます。（勇美子）